

そうなところが少なくありません。極言すれば、極楽から地獄へ迷い込んだような感がいたします。

そこで、せめてものなぐさめに、“北の誉”という清酒から“極楽”という球磨焼酎に飲みかえしました。そのビンには、“極楽”という文字のすぐそばに、あまり目立たない大ききで、遠慮がちに、“適飲保健”と朱書してありますが、それを見忘れて飲んだ日の翌日は例の地獄であります。ところが、北演では沢までゆくのになやしばらくかかりますが、ここ宮演にはいたるところに湧水があり、あの心地よいせせらぎの音をすぐそばに聞くことができます。このような環境は、特殊なオーバーヒートの日には、一転して極楽に変わります。

もちろん、前述のような飲物だけではなく、主食の面でも変更を余儀なくされます。北演では、主食がミズナラのドングリでありました。そしてまた、それは時節がくれば、多少の差はあっても、容易にみつけることができました。しかしながら、ここ宮演にはそれほど多くはありません。しかも、それを足もとを気づかいながらスズタケをかきわけてさがし出さねばならないとなると、あまりうろつきまわらずに楽にエサにありつける方法はないものかと考えるのは当然のなりゆきであります。そこで、ほかの木の種でも消化できるようにこっちの胃袋をきたえなおすのも一考と、その訓練を徐々に始めてみました。ところが、主としてブナ・ミズメ・カエデ類なども結構いけることがわかってきました。そのエサさがしのさい中に、昔の主食のミズナラに出くわすとホッとしますし、主食の全面変更というきびしい事態にたち至らずにすんだ幸運を鼻をなめまわしている今日此頃です。

ここ宮演に転じてからは、従来の「ミズナラ構造用材生産林の森林組織に関する研究」を、「広葉樹化粧単板原木生産林の森林組織に関する研究」に発展的に解消しました。もちろん、北演における従来の試験地などは継続する体制をとっておりますし、まえにもふれた1972年度を初年度とする2121年度までの長期研究も、その後ほぼ順調に継続されており、1978年度をもって第7年度が終了します。残るはあと143年間であります。何回も化け直して出て行く時には、毎たび、白地の着物ですみますし、履物は一切不要ですから、その点では安心しておりますが……………。

10. 林業試験場九州支場育林部経営研究室の紹介

林業試験場九州支場 森 田 栄 一

研究室の紹介に先立って、まず当支場の環境を紹介したい。場所は熊本旧区街地の東より、国道57号線沿いの立田山の麓、細川ガラシャ夫人で有名な細川家墓地泰勝寺と隣接し、近くには熊大文学部（旧五高）、教養学部、工学部（旧工専）および済々黌高校、九州女学院、桜山中学校など学校関係の多い文教地区であり、立田山実験林（約30ha）は支場の研究用としてだけでなく、市民のレクリエーションの場として朝夕の散歩、ランニング、休日の行楽と賑やかであり、また、標高150mの頂上

からは眼下には市街地を，遠くには東に阿蘇山，西に金峰山を一望できる。場内は昨年から継続で第2研究棟，防災実験棟などが建設中で研究施設も一段と整備されつつある。

当研究室は庁舎一階の西端に位置し，本場経営部経営第一科の社会科学の系列と同経営第二科の自然科学の系列に属する研究員から成っている。室長柳技官は前者に属し，3人の研究室員はすべて後者に属している。

現在の主たる研究分野はおおよそ4つに分かれているが，他の研究室との共同研究に対しても随時研究室の能力に応じて連繫がとられている。

1. 社会科学系はこれまで大別して個別経営を扱う経営研究の分野と価格や流通などを扱う経済研究の分野にわかれていたが，最近は行動科学や社会学をとり入れ，対象も林業だけでなく広く生活も含めた山村全般の研究が増加してきている。当研究室の社会科学系もこの第3の道に属し，特別研究「環境保全」の小部門「農村地域における緑地環境の整備方式」を担当し，地域観光開発に対するアセスメント方式，森林景観保全費用に関する推計方式，自然休養諸施設の整備方式についての政策提言をおこなった。

山村は林業の母であり，山村がくずれ去るとき，林業は消え森林のみが残ることになろう。われわれはそうあってはならないと念じて，さきやかな努力を続けている。（柳）

2. 自然科学系は測定，航測，混牧林の3つの部門から成っているが，当研究室には航測関係の研究員はおらず，測定2名，混牧林1名である。

(1) 測定関係では「林分の構造と生長に関する研究」として九州の主要樹種の固定試験地（スギ12，ヒノキ18，アカマツ1）について5年ごとに定期調査を行い，電子計算機により資料の整理を行っている。これは永年作物としての林木の生育経過の記録として価値の高い資料であり，林野庁の愚眼に負うところが大きい。一方，当场実験林内のヒノキ，テーダマツの試験林についても継続調査を行っている。

(2) 「林業における統計的方法の利用」では，電算機の利用も含めて一人測定関係の解析だけでなく，広く支場内の各研究室の解析にも協力してきた。また，最近とみに重要課題としてクローズ・アップされている間伐問題には，早くから電算機を利用した林分シミュレーション・モデルによる研究に着手しており，戦後さかんになった成木林施肥についても，その量的効果の判定方法に関して測樹統計の立場から一案を提言した。

(3) 従来，牧野関係の研究は本場を中心に，北海道，東北両支場および高萩試験地で行われてきた。九州は昭和46年度のプロジェクト課題「畜産利用と林地保全」の研究に参加した時からスタートした。現在「混牧林地のササ生地の取扱い」を分担し，九州における主要な植生の一つであるネザサを対称として，摘葉試験（模擬放牧），肥料の三要素試験に加えて，時期別生長の推移，ササの寿命，立地による現存量などの調査を行っている。さらに，独自のテーマ「混牧林に関する研究」の一環として林間放牧の実態調査，クヌギを用いた草生造林試験なども行っている。

これら一連の調査研究を土台として、九州における山地畜産の粗飼料生産の安定に寄与したい。

(黒木)

以上簡単に研究室の概要を紹介したが、九州御来駕の折は当支場にもお立寄りいただければ幸いである。

11. 沖縄県の森林の現状と天然生常緑広葉樹林の施業方向について

疏大農 平田 永二

沖縄県の林野面積は約13.2万haで、森林施業の対象となる林地面積は約10.2万haである。これを所有形態別に見ると、国有林26%、民有林74%で、全国の割合とほぼ近似している。民有林の所有別内訳は、市町村有林60%、私有林34%、県有林6%で公有林野の占める割合の高いのが特徴となっている。また、立木地は約8.8万haであるが、その約88%は天然林で、人工林はわずかに12%と造林の遅れが目立っている。人工林のおよそ70%はリュウキュウマツで、その他の造林樹種としてはモクマオウ(14%)、スギ(7%)、ハンノキ(4%)、テリハボク、エゴノキ、イヌマキ等がある。天然林の大部分はイタジイを主体とした常緑広葉樹林である。一方、林地の蓄積量は国有林303.4万m³、民有林295.0万で、合計598.4万m³である。ha当り蓄積は国有林113m³、民有林39m³、平均59m³で、特に民有林は内容的に著しく低い現状にある。林地に占める天然生常緑広葉樹林の蓄積割合は約81%である。

このように沖縄の森林資源の大半を占める天然生常緑広葉樹林は、イタジイの外ヒメユズリハ、コバンモチ、イジュ、イスノキ、オキナワウラジロガシ、タブ等30~50種の樹種で構成され、一般に樹高が低く、立木本数の多いことと相俟って大径木が極めて少ない。そのため、生産性の低い粗悪林分が目立って多く、木材生産の立場からは、けっして良好な状態とはいえない。しかし、これは戦中戦後の混乱期に軍用材、薪炭材及び復興資材として大部分の森林が皆伐またはぬき伐りされ、林相が極度に悪化し、何の保育も加えられず放置されてきたためで、林分構造の改善を図り、林相を回復させ、生産性を高めることに努めるならば、経済的な経営も可能であると思われる。

一方、沖縄は自然環境の保持、国土保全、水資源の確保等、森林に課された公益的役割を重視しなければならない地域が多い。

そのため、沖縄においては森林の公益的特性を十分に認識し、公益的機能と木材生産機能の調和のとれた施業技術の体系化に努めるべきであり、これが沖縄林業の重要な課題でもあろう。しかし、本県の森林土壌は地勢の影響を受け乾性型が多く、乾性、弱乾性の土壌及び岩石地で約6割を占め、造林に適しない所が多いといわれる。土壌の維持、増進を図るためにも大面積の皆伐は極力さげなければならない。